

道徳的判断に関する一研究

意図の認知と主観的判断の形成について

二 宮 克 美

I 問題および目的

子どもの道徳的判断が、Piaget, J (1932) によって研究され、客観的判断と主観的判断という2つの段階があることが見出された。客観的判断とは、行為をその行為の意図とは離れて、物質的損害の大小によって判断するものである。一方、主観的判断とは、行為をその行為の意図の善悪によって判断するものである。

主観的判断の形成について主に2つの流れがある。一つは、Kohlberg を代表とする認知論的アプローチで、子どもの内的な要因—認知構造の再体制化—を重視している。もう一つは、社会的学習説からのアプローチで、子どもの外にある要因—modelingなどの社会的要因—を重視している。

Bandura と McDonald (1963) は、反応—強化の随伴性の操作と適切な社会的モデルの設定によって、発達のどちらの方向にも変容可能であることを示した。しかし Cowanら (1969) は、Banduraらの詳細な追試を行い、彼らの結論をほぼ支持したが、発達の方向とは逆の方向の変容において社会的強制を反映していた疑いがあるという問題を提起した。本研究の第1の目的は、このことと関連しており、modelingによる客観的判断から主観的判断へという発達の方向に沿った変容 (up条件) と、その逆の発達の方向に逆らった変容 (down条件) が同じなのかを見ることにある。

また、King, M (1971) は、行為者の意図を認知できるかどうかということを、道徳的判断を研究する際に一つの重要な要因として考慮しなければならないと示唆した。そして、主観的判断が可能となるためには、意図の認知から始まる内部過程が必要であると考えられた。本研究の第2の目的はこのことと関連しており、modelingの手続が意図を認知しているものと認知していないものに等しく効果的なのかを検討することにある。そしてもし意図の認知・非認知によりmodelingの効果が異なるなら、Crowley (1968)の研究などで見られた、訓練群なのに全く変化を示さなかった子どもの説明が可能になると考えられる。また、その次の問題として当然、どのようにすれば、意図を認知していないものに主観的判断をできるようにさせられるか、が上げられるであろう。本

研究の第3の目的はこのことと関連しており、意図を認知していないものを、意図に着目しやすい実験状況で、主観的判断を可能にさせることである。

本研究の実験 I では、目的の1と2が検討され、実験 II では、目的の3が検討される。

II 実験 I

方法 Piaget タイプの例話 (良い意図—物質的損害大, 悪い意図—物質的損害小) を作成し、予備調査の結果をもとに15組の例話が選定された。被験者は4才~9才の園児・児童で、個別にPretest を施行され、その主観的判断のでき具合により各10名からなる4群の実験群 (definite high, tentative high, tentative low, definite low) が構成された。移行期のものの基準として、name反応 (「どちらがより悪い子ですか」に対する反応) と explanation 反応 (「どうして、その理由は」に対する反応) とが矛盾している項目の数という基準が従来の基準に付け加えられた。

実験は、以下の3つの時期より構成されている。

Pretest ; 実験者は例話の内容を絵にした図版を見せながら、例話を読んで聞かせ、子どもの道徳的判断のオペラント水準をとる。与えた例話は8項目であった。

Conditioning ; model は、被験者のオペラント水準とは逆の水準の道徳的判断を一貫して示すようあらかじめ決めておく。modelと被験者は代わる代わる内容の異なる例話を施行され、実験者によりmodelのname反応と explanation 反応のそれぞれに対し、「よろしい」という言語的強化がされる。被験者に対しては、オペラント水準とは逆の水準の判断を示した時のみ、同様の言語的強化が与えられる。例話は、被験者に8項目、modelに8項目与えた。なおmodelは、被験者と同性の大学生であった。

Posttest ; 各群の被験者の半数は Conditioning の直後に、残り半数は Conditioning の約2週間後に、新しい実験者により Posttest をうけた。例話は、新しい項目などを含めた8項目である。実験終了後、2,3の質問がされ、意図を認知できるかどうか調べられた。

結果 4元配置の分散分析 (条件づけの方向×オペラント水準× Posttestの時期×実験ブロック) の結果、

条件づけの方向×実験ブロックに有意差が見られた。そして、up条件とdown条件ではmodelingの効果が異なっており、up条件において効果は認められるが、down条件ではその効果がほとんど見られなかった。また Posttest の項目のタイプ別において分析がなされ、up条件においてのみ条件づけの効果が般化されることが明らかにされた。以上のことから、modelingの手続によって発達の方に沿った変容は可能であるが、発達の方とは逆の変容は困難であることが述べられた。

両 low 群の被験者の意図の認知・非認知と Pretest から Posttest への道徳的判断における変化・非変化との間に有意差が見られた。即ち、Pretest においては、意図認知群と非認知群との間に有意差が見られなかったけれども、Posttest において、認知群の方がより条件づけの方向に変化していた。以上のことから、主観的判断ができないものには2種類の型があること及びmodelingの効果が、それらのものには異なっていることが述べられ考察された。そして、主観的判断ができなくかつ意図を認知していないものに、どのようにしたら主観的判断をできるようにさせられるか、が次の問題とされた。

Ⅲ 実験Ⅱ

方法 意図の認知について、King (1971) が考案したものをを用いた。それは以下の4つの例話から構成されている。1) accidental — neutral 2) accidental — negative 3) intentional — neutral 4) intentional — negative これらの例話を1例話3コマからなる描画にして見せ、質問をしながら子どもの意図の認知を測定する。被験者は4才～6才の園児で、Pretest の結果より意図を認知していなくかつ主観的判断ができないものが選ばれ、各8名からなる4群の実験群(意図強調条件vs非強調条件×definite low vs tentative low)が構成された。

実験は、実験Ⅰの時と同様3つの時期より成る。

Pretest ; 上述した意図の認知の測定および道徳的判断の測定。道徳的判断の例話は5項目与えられた。

Conditioning ; 意図強調条件は、例話の中の行為者の意図に着目しやすいよう、意図の箇所を2度繰り返して読み、なおかつ3コマからなる視覚的補助材料の意図について描いてある箇所を赤い線でふちどりしてup条件が行なわれた。非強調条件は、実験Ⅰのup条件と同様の手続で行なわれた。なお両条件とも、例話はPretestの時と同一の5項目で提示順序は変えてある。model の例話は被験者のものとは全く異なっている。「答があったら、丸いクリップをあげるからたくさん集めて下さい」という教示をして、丸いクリップを与えるという強

化を言語的強化とともに与えた。他の具体的な手続は実験Ⅰの手続と同様である。

Posttest ; 各群の被験者の半数はConditioningの直後に、残り半数はConditioningの約1週間後に、新しい実験者によりPosttestをうけた。例話はPretestおよびConditioningで用いられた5項目を新しい項目5組と一つおきにし、かつ異なった提示順序にして提示した。

結果 分散分析の結果、次の2つの要因に主効果として有意差が見られた。(1)条件づけの方法(意図強調vs非強調)(2)実験ブロック(Conditioning vs Posttest)。そして群間の比較の結果、ConditioningおよびPosttestにおいて意図強調条件群と非強調条件群の間にそれぞれ有意な差が見られ、前者の方が後者より主観的判断を形成していることが明らかにされた。そして、そのことから主観的判断の形成は、modelingの手続により可能であるが、それをより有効にするためには、行為者の意図を強調しそれに着目させる方法によって条件づけをすることがよいということが述べられた。また、Posttestの項目のタイプ別による検討において、各群とも条件づけの効果を新しい項目に般化させていることが明らかにされた。

Ⅳ 討論

本研究で得られた結果の第1点(すでに主観的判断が可能である子どもに、一貫して客観的判断を示すmodelを観察させても、ほとんどその影響を受けない)について、補足dataをもって検討が加えられた。検討の結果、やはりすでに主観的判断が可能なものは非常に変化しにくく、たとえ変化したとしても社会的強制やAsch効果を受けている疑いが濃いことが述べられた。

また、意図の認知と主観的判断の形成について検討が加えられた。その結果、主観的判断をするためには、意図の次元を認知することが必要条件であることが述べられた。しかし、ただ単に意図を認知するだけでは、主観的判断をすることはできなく、意図を認知した上で結果の次元よりもそれが重要であることを知る必要があり、かつそれを言語化でき、意図性の原理を他の例話にも使用できる能力が必要であると考えられた。

移行期のものについて、若干の問題点が出され、移行期のものについてのより正確な知識が必要とされた。そうすることによって、道徳的判断の形成過程がより明らかにされると考えられる。また、意図を認知する能力と道徳的判断の形成の過程との対応づけをより明確にすることが期待された。